

ミヒヤエル・エンデ作『はてしない物語』 における成長概念について

11K027 金沢 友李

はじめに

『はてしない物語』の主人公、バスチアン・バルタザール・ブックスは、怖がりで小太り、勉強もできなければ運動もできない子どもだった。そんなバスチアンがファンタジーエン国から戻ってきたときには、別人のように変わっていた。しかし、バスチアンは運動ができるようになったわけでも、頭がよくなったわけでもない。ましてや、痩せて美少年になったわけでもない。バスチアンが変わったのは、身体的・知的な能力ではなく、精神的側面である。

この『はてしない物語』はバスチアンの心の成長物語だと言っていい。このことについては、著者であるミヒヤエル・エンデ自身が言及している。

『はてしない物語』でたいせつなのはね、バスチアンの心の成長のプロセスなんだ。彼はとにかくまず、自分の問題と対決することを学ばなくてはならない。彼は逃げ出す。けれども逃げることが必要なんだ。なにしろ、逃げることによって彼は変わるんだし、自分というものを新しく意識するようになる。そのおかげで、世界というものに取り組めるようになる。物語の冒頭、父親に対する不安と、コレアンダーに対する不安が描かれているが、じっさい物語は、そのふたつの不安の敷居をバスチアンがまたぐところで終わる。それから先どうなったかは、また別の物語でね、また別の機会に話されることになる。『はてしない物語』というのは、昔ながらの意味での教養小説で、そこでは心の成長というのが描かれている。だから産業社会やテクノロジーなどの問題とはいっさい関係ないんだ。なにしろバスチアンにとっては、まったく個人的なオデュッセイが問題なんだから。⁽¹⁾

『はてしない物語』において最も重要なのはバスチアンの心の成長なのである。このレポートでは、バスチアンの成長の過程を考察し、成長に対するエンデの考えを検討する。

1. 失敗と成長

バスチアンが成長したとわかるのは、ファンタジーエンから現実世界に戻ってきてからのことである。それまでの長い間、バスチアンは失敗続きである。これはエンデの失敗に対する考えによるものである。エンデは今日の子どもの失敗の経験をする機会が少ないことについて次のように言っている。

ほんとうにそれはとっても重要な問題なんだ。まわり道が必要不可欠であること。失敗にはらまれている神秘。ぼくのもうひとつの物語では、そういうことが中心テーマのひとつなんだ。バスチアンはじつにたくさんの失敗をする。厳密に言えば、ほとんど失敗だらけなわけ

だ。けれどもまさにそのおかげで、バスチアンはおしまいには、ちゃんとやれるようになった。このモチーフは新しくもなければ、ぼくの独創でもない。それはね、なかでもE.T.Aホフマンの『黄金の壺』のモチーフなんだ。⁽²⁾

『はてしない物語』の中でバスチアンは多くの失敗をする。しかし、失敗は必要なもので、その経験によって成長できるというのである。バスチアンが大きな回り道をすることは、失敗がマイナスのものであり、失敗をしない方が良くとされている今日の教育に対するエンデの批判的なメッセージなのである。

また、物語の中でも回り道をする事の大切さを説いている。第9章、女王幼ごころの君の場面をみてみよう。大いなる探索の旅を終えてエルフェンバイン塔へ帰ったアトレユは、自分が旅に出る前から幼ごころの君は旅で何が起るのか、その結果どうなるのかを知っていたことを知らされる。

アトレユの眉間にけわしい怒りのしわが刻まれた。「おっしゃるとおりだとすると、なにもかも必要はなかったのですね。女王さまのお決めになることは、しばしばわれわれには不可解だ、と聞いたことがあります。そうでもありません。けれども、あれだけいろいろな目にあって帰ってきた今、あれが女王さまのお慰みにすぎなかったとは、おとなしくお聞きする気持ちにはとうていられません。」幼ごころの君の目が真剣になった。「慰みでしたのではありません、アトレユ。苦勞をかけたことも、よくわかっています。でも、そなたがのりこえなければならなかったこと、あれはみな必要だったのです。…そなた、アトレユがしてきた大変な苦勞が、実はみんなかれのためであったこと、そして全ファンタジーエンがかれを呼んでいるということが、今こそかれにわかったでしょう！」⁽³⁾

幼ごころの君は、答えを見つけることよりも、その過程が重要なのだと言っている。何かをなそうとするとき、その結果よりも、それまでにしたことの方が大切で、意味があるというのである。

2. 自己の忘却と再生

第22章でバスチアンは、無理やり抜いたシカンダの剣でアトレユを刺してしまう。このとき勝者はバスチアン、敗者はアトレユに見える。しかし、実際に敗北を喫したのは、アトレユではなくバスチアンだった。⁽⁴⁾ バスチアンのマントは真っ黒になり、エルフェンバイン塔は崩壊してしまう。

第24章では、すべてをなくし彷徨うバスチアンの前に「変わる家」が現れる。バスチアンが成長するうえで欠かせない場面である。「さあ大いなる君、また小さくおなり！子どもにかえって入っていらっしゃい！」⁽⁵⁾ というアイウオーラおばさまの言葉から、変わる家にはいったとき、バスチアンは子どもに戻ったと考えられる。変わる家に入ることは母親の胎内に入ることと同意である。アイウオーラおばさまは花や実を大量につけることができる。そしてその実をバスチアンにふるまい、甘やかしてくれる。母親のようにバスチアンを無条件に愛してくれるアイウオーラおばさまは、別の人間になろうとするのではなく、自分自身が変わる事の大切さをバスチアンに諭す。

第25章で、ついにバスチアンは自分の名前まで忘れてしまう。つまり今のバスチアンはもはやバスチアンではなくなっている。自分が生まれ変わるには、幼ごころの君のように誰かに新しい名前をつけてもらわねばならないのである。そしてそれはアトレユによってなされる。

第26章では、生命の水の問いかけに、記憶をなくしているバスチアンの代わりにアトレユが答え

る。ここでアトレユがバスチアンの名前を叫ぶことで、名前のない少年はアトレユから「バスチアン・バルタザール・ブックス」という名前を与えられる。そしてバスチアンは生命の水を飲むことを許される。

バスチアンが泉へ通じる門をくぐると、次第にファンタジーエンに来る前の姿を取り戻していく。そして生命の水を飲み、自分が誰か、自分の生きる世界はどこか理解し、愛することができるようになる。さんざん否定していた元の自分自身を愛することができるようになる。このとき、バスチアンは生まれ変わることができたのである。生命の水を飲む、という行為はそうすることによって命を与えられることだと推測できる。そして、生命の水を飲むことにより愛することができるようになるということは、生きることは愛することだと理解していいだろう。

3. 現実世界での成長

現実世界に戻ってきたバスチアンは、これまでの否定的で後ろ向きな思考から、前向きな考え方に変わっていた。もう自分自身を卑下したり、自信が持てないということはなかった。

現実世界で変わっていたのはバスチアンだけではなかった。バスチアンの父親も変わっていた。バスチアンの父親はいなくなった息子を心配し、戻ってきた彼を、両腕をいっぱい広げて迎えた。そして1日中、話を聞いてくれた。以前はバスチアンとほとんど口をきかず、ただ悲しくしているだけだった。このとき、彼の父親は本当にバスチアンのように変わったのだろうか。バスチアンは生命の水を飲んだことにより愛することができる人になった。だから、ありのままの自分を受け入れることができるようになり、同時に彼はありのままの父親を愛することができるようになった。そのことこそが、父親が変わった要因となっている。⁽⁶⁾

次の日、バスチアンは自分からコレアンダー氏のところへ謝りに行く。父親が代わりに行こうかと言うが、バスチアンはそれを断わり、1人で謝りに行く。以前のバスチアンなら考えられないことである。バスチアンは自立しつつある。自立心を身につけることは、子どもから大人になるうえで重要な成長過程である。

おわりに

バスチアンはファンタジーエンにきたとき、元の自分とは違う姿になろうとした。これは自分自身を否定し、捨てることになる。願いが叶えられる代償として、現実世界での自分の記憶が消えていくため、バスチアンは自分をどんどん失っていく。そして最終的には名前も失い、バスチアンですらなくなってしまう。しかし、それはバスチアンの成長には必要なものだった。間違いは決して悪ではなく、間違いがあったからこそその成長なのである。

愛することができるようになったバスチアンは、自分や周囲にさまざまな変化をもたらしていく。自分自身や周りの人をありのままに受け入れることができるようになったことにより、自信がつき、勇気をもてるようになっていた。また、周囲にいる人はそんなバスチアンの影響を受ける。そしてそれは衰えることはない。バスチアンが得た、愛することの喜びは周りの人を癒し続ける。このことこそバスチアンが身につけた、最大の成長なのである。⁽⁷⁾

註

- (1) ミヒャエル・エンデ（丘沢静也訳）『エンデ全集〈15〉オリーブの森で語りあうーファンタジー・文化・政治』岩波書店、1997年、54～55頁。
- (2) 同上、61～62頁。
- (3) ミヒャエル・エンデ『はてしない物語 上』岩波少年文庫、2000年、287～288頁。
- (4) 小林良孝「ミヒャエル・エンデ著『はてしない物語』における成長過程と成長概念について」
<http://hdl.handle.net/10297/472>、2004年、42頁。
- (5) ミヒャエル・エンデ『はてしない物語 下』岩波少年文庫、2000年、334頁。
- (6) 小林、前掲書、53頁。
- (7) 同上、55頁。

(指導教員 桑原ヒサ子)